
俺とあいつと星の空

高田高

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

俺とあいつと星の空

【Nコード】

N5770E

【作者名】

高田高

【あらすじ】

【七夕小説企画『星に願いを』】 幼なじみで親友の亮介と修一。仲の良い二人。しかし、亮介には、修一には言えない秘密があった。それは……

(前書き)

読者様へ この作品はBLにカテゴライズされてい
ますが、そういったジャンルが苦手な方が嫌悪される描写は一切含
んでいないつもりです。BLと構えずお読み下さい。

夜空に輝く幾千、幾万、幾億の星。昔、聞かされた話しにこんな
のがある。

『人々の願いを叶えた星は、流れ星になってその使命を終える』と
。

ガキだった頃は、そんなロマンスを信じたもんだけど、今は笑い
話の一つ。

でも、もし

願いが叶うなら

お星さま、俺を

七月初旬の午後三時。

カットソーにデニムハーフパンツ姿の俺は、くそ暑い街中を、マ
ウンテンバイクで疾走していた。

吹き抜ける風が、自慢の長い黒髪をふわりとさせてくれる。

心地良い

風を感じながら向かう先は市立図書館。

大学のレポートをやってつけるため、資料あさりにこつして出掛け
ている。

ふと、ショーウィンドーに映る自分と目が合い、愛車を止めて、

俺を見る。

カラーコンタクトを入れた蒼い瞳、小さめの鼻に小さめの口、ベイスになっっている面はそこいらを歩く女なんかより、よっぽどレベルが高い。

視線を胸に移すと、女にならあるべき膨らみが俺には無い。

そう。俺は男だ。

でも、心は女。

心無い奴らの言い方を借りるなら、オカマってやつだろう。

女に生まれられなかった自分に、いつものように溜息をつくとき、気を取り直して愛車のペダルを踏込んだ。

しばらく走ると、歩道脇の時計塔横に立つ見知った後ろ姿を見つけて、高鳴る鼓動を抑えながらペダルを踏み込み、加速して近づく。

「よお！ 修一！ お待たせなー！」

俺がそいつの後頭部を、急停止と共にぺしりとやると、そいつはずれた四角フレームの眼鏡を戻しながら俺を睨んだ。

「亮介！ 後頭部叩くのいい加減やめろ！」

「あー！？ 聞こえないなあー！」

修一は、幼少時からの付き合い。幼なじみってやつだ。

そして、俺の想い人。

いつから修一を意識するようになったのか、それは正直なところ俺にもわからない。ただ、気が付いた時には、修一の姿を目で追うようになっっていた。

俺は愛車からよっこらせと降りると、修一と並んで歩く。身長は一八センチある修一の方がやや上。並んで歩く姿は、傍から見たら、長身の彼女連れだろうか。

こんなくそ暑い日にわざわざ出掛けたもう一つの理由は、修一に図書館へ行って調べ物しよう、と誘われた事もある。とは言え、俺は化粧やら服選びやらに随分と時間をくうため、一緒に出掛ける時どこかで待ち合わせる。まるでカップルだ。

修一が誘ってこなければ、一日ぼけーっと部屋でくつろいでいた

はずだ。

つまり、レポート用の資料うんぬんなんてどうでもよかった。こいつと一緒にいられる時間が欲しかった。ただ、それだけ。

「なんだよ？」

「えっ？ いや、いや……別に……」

いつの間にか俺は修一を見つめていたらしく、それに気付いてさつと視線を横にやる。耳まで熱いのは、気温のせいなんかじゃないだろう。

「ところでお前、彼女とか作んないのか？ 結構女子に人気あるんだぞ？ 女装してるけど顔は良いし」

「あ。……ああ、そうだな。彼女、ね……」

彼女

そうだ。俺は男だ。

男。
どんなに綺麗に化粧しても、どんなに女らしく振舞っても、俺は

もし、お前の彼女になりたい、なんて言ったら、お前はどんな顔する？

「おい」

「へっ!？」

修一は突然、俺の二の腕を掴み、ぐつと引き寄せた。肌が触れ合い、修一の体温が腕に伝わる。

「ななな、なに!？」

「歩行者。お前、自転車引いて歩いてんだから、前見る。危ないだろ？」

もう少して俺の引いていた愛車に、前から来るやつが接触しそうだったらしい。図書館までの道は、俺と修一と愛車だけで占拠出来ちまうくらいせまつちい。たまに見せるこついったお前の優しさ、俺はどう反応したらいいんだよ。

「修一、腕、放して」

「あ、ああ……」

二の腕に残る修一の熱に、俺はしばらく落ち着く事が出来なかった。

図書館入り口の駐輪所に愛車を止めると、くそ暑い外でわざわざ待っていやがる、このバカな想い人に駆け寄り、腕に抱きついてやる。

嫌がる、よな？

「なんだよ？　どうかしたのか？」

嫌がるでもなく、俺を見る修一。

俺の予想とは違いこのバカ、俺を抱っこちゃん状態にしたまま図書館へ入ろうとしやがった。だからとっさに腕から離れたわけだけど。

俺、なにやってんだろうな。

その様子に、修一も不思議そうな表情を浮かべて、こつちを見ている。

「変だぞ？　どうかしたのか？」

そう言っただけ心配そうにする修一の顔は、どこまでも優しい。俺を気持ち悪がるムカツクやつらとは、全然違う。

ただ、優し、過ぎる……。辛いんだよ。バカ野郎。

「亮介？　どした？」

「な、なんでも……ない」

少し涙声になり掛けた俺のそれに、修一は面倒くさそうに頭を掻くと、その手を俺の頭に寄せ、ぐりぐり撫で回しやがる。

自分の頭搔いた手で、人の頭撫でるなよ！　なんて言えない。声が、出ない。

「お前は昔っから不思議ちゃんだよな。どうかしたのかよ？　なんで急に泣き出す？　俺、なんかしたか？」

修一は俺の気持ちには気付かない。当たり前だ。男の俺が、男のお前を好きだなんて考えられないよな。

そんな考えに、涙腺が余計に緩くなりはじめ、ついより所を求め、

修一の胸に顔を埋めてしまった。まずい！ と思ったが、修一は溜息くれるだけで、突き放す事もしやがらない。

気持ちが揺れる

いっそ、突き放せよ。バカ野郎。

「今日は変だぞ。調べ物はまたにしとくか」

俺なんか気にするなよ、って声にしたつもりが、うなずいちゃまった。

修一は俺の愛車のチェーンロックを、慣れた手つきで解放すると、俺に渡すでもなく引きはじめた。

「しゅう、いち。おれ、じぶんでひく、から……」

ダメだ。もれる言葉が涙声になっちゃう。

お前はどれだけ俺に優しくするんだよ？ どれだけ俺を、苦しませる？

「いいから。行こう」

優しく微笑みくると、修一はすたすた先を歩きはじめた。

修一の着る、太陽光をがんがん反射しやがる白いTシャツの裾を、気付かれないようにそっと掴み、その後ろを少しうつつむきながら歩く。

まるで、女子中学生みたいだな。俺。

などと考えながら、くすりと笑ったりすると、それに気付いた修一が急に振り向いた。

「もう泣き止んだのか？」

「あ、ああ……うん」

あんまり急だったため、裾を掴んだまま。

ただこのバカ、そんな事は気にも止めず、さっさと先を歩く。だから俺は、ずっと裾を掴んだまま。

手を繋げないならせめて、せめて……。

帰り道に行く途中、修一の提案で街にある丘に向かう事にした。

ガキの頃よく遊んだ、公園。そこから眺める町並みと見上げる空

は格別で、特に星空は輝く星に手が届きそうな程だ。

少しばかり急な上り坂を、俺と修一は愛車を引きながら、よいしよよいしよと登って行く。

ガキの頃はここを全速力で駆け上がったっていたわけだけど、あの頃より体力のある今はそれが出来ないってのは、なんでだろうな。

そんな事を、宙に向けてぽつりと言ってみる。返って来たのは、修一の疲れた笑い声。それに合わせて、俺も笑う。次第に互いの笑い声は大きくなり、意味もなく大笑い。

「あー……やっと、着いた」

修一はそう言つと、愛車を俺に預け駆け出す。その姿はガキの頃のままだ。

すべり台の横に立つと、修一は俺に向けて手を振る。無邪気な笑顔だ。

俺は愛車を車止めの柵に立て掛けると、ガキの様な笑顔のバカなあいつに向かった。

「相変わらず、ここは変わんないよな」

「ああ……、そうだな」

そう言つて、修一の横よこ面に目をやる。なんとも嬉しそうな笑み。つい見とれてしまう。

「なあ、亮介」

「あ、な、なに!？」

少し裏返った妙な声にくすりと笑みくれると、修一は空に輝く光点を指差した。一番星だ。

気が付けば、もう午後を回って随分と経っている。お星さまが顔を出しはじめの時間てわけだ。

「修一、もう帰ろうか」

俺の声が聞こえているのかいないのか、修一は動こうとしない。

「修一」

「子供の頃、よくここで星を眺めたよな」

つぶやくと、修一は近くの大人二人座れば満席の、ちまいベンチ

に腰を下ろし、空を見上げた。

仕方なし俺も隣に座り、空を見上げる。なんて事はない、見知った空だ。青色は少しばかり陰を強くし、暗い色彩へと変化していく。夜の訪れを知らせている。

ぼーっと空を眺めていると、視界ドアップに、修一が入り込み、驚いて飛び上がった。

「な、なんだよ!!!?」

「口半開きでさあ、ちよつと面白かったから、真上から見てみようかと」

ばくばくとやかましくなる鼓動を、皮膚越しから押さえ付けるように胸に手を当て、にやけ面のバ力を睨み付けてやる。

「そんな怖い顔すんなよ。せつかくの美人面が台無しだぞ?」

「はっ!?!? な、なに言っただよ!」

からかつてる わけではないのか、修一はさっきのムカツクにやけ面ではなく、いつもの優しい笑顔に戻っていた。

陽が落ち、街頭に灯りが入り、光は俺と修一をうつすら照らす。

おぼろげな修一の姿がやけに、色っぽく感じる。

「あれ……?」

修一は間抜けな声を上げると空を見上げ、つられて俺も見る。眼前に広がるただっ広い星の広場と、そこを流れる長い長い星の川。

修一はジーンズからケータイを取り出すと、サブモニターに目をやっている。

「ああ、今日、七日だ」

七月七日。七夕だ。

織姫星と彦星が、年に一度出会う日。天の川を渡って二人が出会う時に願い事をする、それが叶うとかどうか。

そして、人々の願いを叶えた星は、流れ星になってその使命を終える、と。

ガキだった頃は、そんなロマンスを信じたもんだけど、今は笑い話の一つ。

でも、もし

願いが叶うなら

お星さま、俺を

「もし、願いが叶うなら」

俺が目をつぶって願いを掛けようと思った時、このバカ、間の悪い事につぶやきくれやがる。

「願いが叶うなら？」

俺は少しばかり声量を落とす。人の願い事の邪魔してくれたからな、ちよつとばかりし機嫌を損ねてやる。そんな俺に、修一は相変わらずの明るい笑顔。

「お前、なに願うよ」

「え」

言えるわけがない。

俺を修一の彼女に　なんて、そんな事。

だから。

せめて、一緒に。

「そうだな。バカな親友とこれからもバカやれますようにって、お願いしようか？」

親友として

「はは、バカだな、お前」

一緒に

「な、なんだよ。だったら修一は？」

居たい

「俺とお前は腐れ縁でやつだよ。多分、ずっと一緒だろうな」

その瞬間、一筋、二筋、星が尾を引いて、地平線遙か遠くへと流れて行ったのを目にし、頬が緩んだ。

七月初旬の午後三時。

少しばかり西に傾く太陽は、自身の存在を示すように外気を熱してくれる。

お陰様で俺の薄化粧は汗で崩れ、公園の給水場で落とす事になった。

化粧を落とし終え、ハンドタオルで顔を拭いていると、俺の背中をぽんと叩く手の感触。振り返らなくてもわかる、お前の気配。

「おっす。今日も暑いのに厚化粧か？」

下らないオヤジギャグくれる修一の足を、踵で軽く踏み付け、振り返り様、にやりと笑顔を向ける。

「厚化粧は余計だろ」

「ああ、余計だな」

修一の即答に、は？ と間抜けな返答をすると、修一は俺の履いてるハーフパンツのポケットから手鏡を探し当て、そこに俺の顔を映す。化粧の落ちた、素の顔だ。

「な、なんだよ。俺の顔になんかあんのか？」

それに対して、いつもの明るすぎる笑顔を向ける。「厚化粧つか、化粧する必要がない」

「ば、ばっかじゃねえの！？ そう言うのは、か、彼女に言えよ！」

焦る俺に、このバカ、くすくす笑いやがる。そんな笑顔を向けられ、俺も自然と笑顔になっていた。

見上げる空はどこまでも青く、雲一つない

俺とあいつと星の空

終

今年の夏も、
くそ暑くなりそうだ

(後書き)

企画参加者様へ 参加者様はこの作品にコメントの際、
評
価ではなく感想のみでお願いします。

俺とあいつと星の空

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5770e/>

俺とあいつと星の空

2009年4月12日07時47分発行